



～ 若手会社員の子ども時代の遊び体験と自身の現状に関する意識調査 ～

## 子ども時代の豊富な遊び体験が現在の自己肯定感に影響

「よく遊んでいた」社会人ほど前向き思考、現状の生活充実度にも比例

子どもの健全な成長に寄与することを目的に教育玩具の輸入・開発・販売とあそび環境開発を行う株式会社ボーネルンド（本社：東京都渋谷区、代表取締役社長：中西弘子）では、この4月より社会人歴2年目～4年目を迎えた民間企業に勤める若手ビジネスパーソン930人を対象に、「小学校低学年の時期における遊び体験と自身の社会人としての能力（以下社会人能力）や生活満足度に関する意識」について4月上旬にインターネット調査を実施しました。

当社では、5月5日の「こどもの日」を、子どもの健全な成長について大人全員が考える日とすることを提案し、社会全体が子どものあそびの大切さを見直すきっかけにしたいと考えています。今回はその一環として、若者の子ども時代の体を動かす遊び体験と自身の現状に対する意識について調査を実施しました。新入社員や若手社員の傾向として、自己肯定感が低いことや「ゆとり世代」「安定志向・内向き志向」と称されて久しいなか、新年度を迎えたこの4月、新入社員を迎えた企業や団体も多いのではないのでしょうか。豊かな遊び環境が子どもの健やかな成長に寄与すると考える当社は、重要な人格形成期にあたる小学校低学年のころの遊び体験が、社会生活で求められる基礎的な能力や自己肯定感の素地養成に影響があると考え、若手会社員の小学校低学年のころの体を動かす遊び体験と、自身の社会人能力や現状に対する肯定度・充実度との関連について調査しました。

### 【 調査結果のポイント 】

#### ■ 社会人能力の捉え方×子ども時代の遊び体験

- 社会人能力に肯定的な社会人ほど、子ども時代の遊びの頻度が高く、集団遊びが好きだった一方で、社会人能力に否定的な社会人ほど、子ども時代の遊びの頻度が低く、集団遊びが好きではなかった傾向
- 自身の社会人能力について、「忍耐力がある」が6割超で高い傾向

#### ■ 自身の現状への肯定度・充実度×子ども時代の遊び体験

- 自身の現状に肯定的な社会人ほど子ども時代に頻繁に遊んでおり、自身の現状に否定的な社会人ほど遊びの頻度は低い傾向にあることが明らかに
- 「自分のことが好きである」、「生活が充実している」という回答がともに約半数

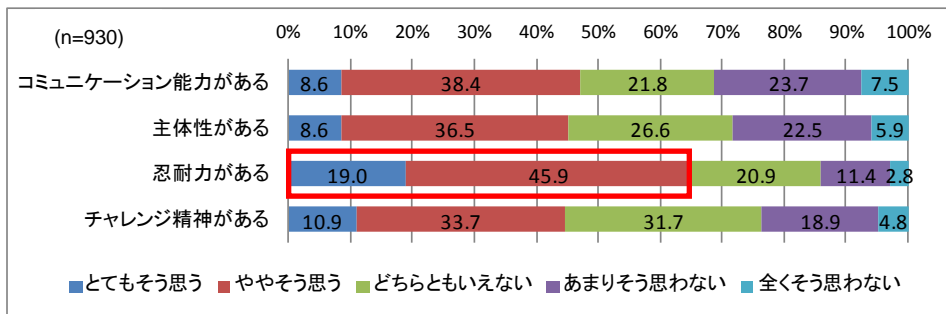
### 【 調査概要 】

調査方法 : インターネット調査  
調査地域 : 全国  
調査対象 : 民間企業に勤める社会人（正社員）歴2～4年目の男女  
有効回答数 : 合計930サンプル（社会人歴年数ごとに①2年目、②3年目、③4年目の3つの群に分け、それぞれ男女半数ずつ310サンプルの回答を得た）  
調査時期 : 2014年4月上旬

## 社会人能力の捉え方と子ども時代のあそび体験

### ～今時の若手社員は耐え忍ぶ世代？～

Q1. 仕事上でのご自身のことについて、あてはまるものをお選びください。

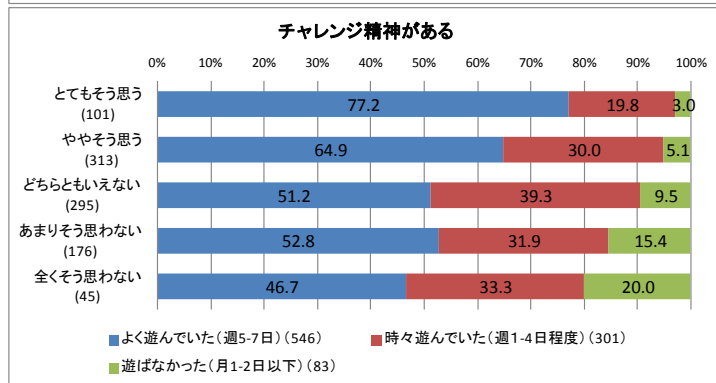
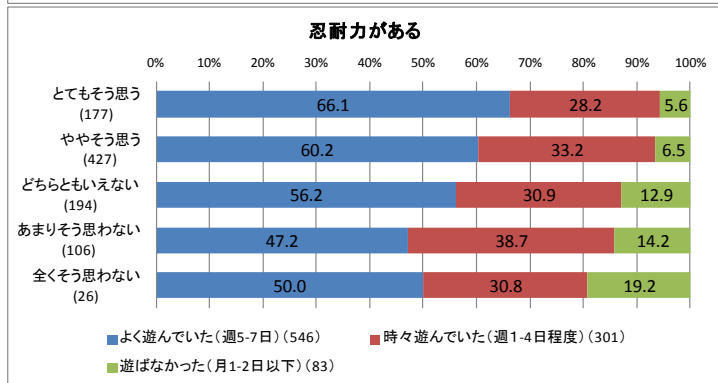
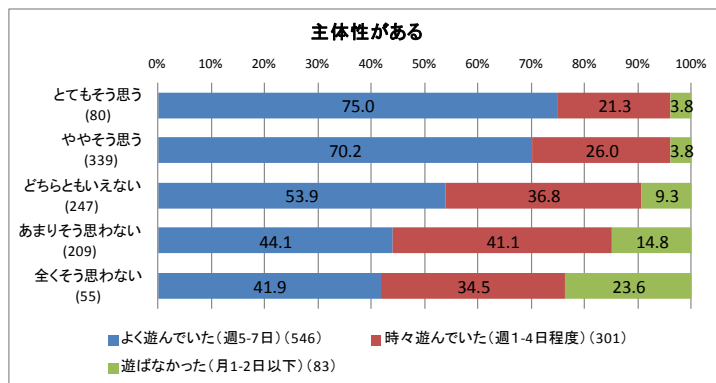
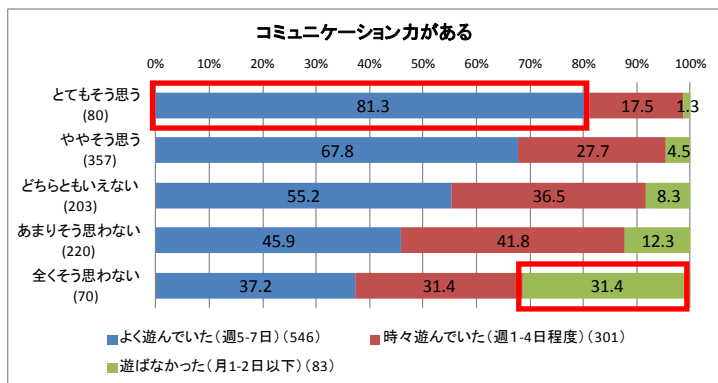


仕事における社会人能力を自分が持っているか尋ねたところ、忍耐力において 60%以上が「とてもそう思う」「ややそう思う」と回答しました。現在の 20 代はバブル崩壊後、日本の厳しい経済状況下で育った世代であるとともに、社会人として社会に揉まれることで、学生のときよりも忍耐力を身に付けたと感じるのかもしれない。一方、コミュニケーション力、主体性においては 3 割近くが「あまりそう思わない」「全くそう思わない」と答えており、ほかの能力とくらべて自信がないと感じている若手社会人が多いことがわかりました。

### ～自分の社会人能力に肯定的なほど、「よく遊んでいた」と回答～

#### 【社会人能力の捉え方と体を動かす遊びの頻度】

次に、Q1 の社会人能力と子ども時代の遊びの頻度の関連性について調べたところ、下記の結果となりました。あそびの頻度については、「毎日（週 7 日）」「ほとんど毎日（週 5～6 日）」を①「よく遊んでいた」群、「時々（週 3～4 日）」「たまに（週 1～2 日）」を②「時々遊んでいた」群、「ほとんどしなかった（月 1～2 日）」「しなかった（月 1～2 日以下）」を③「遊ばなかった」群の 3 群に区分しました。

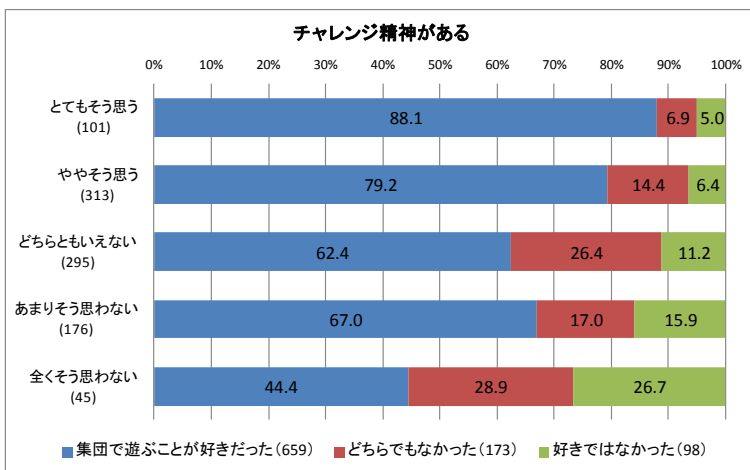
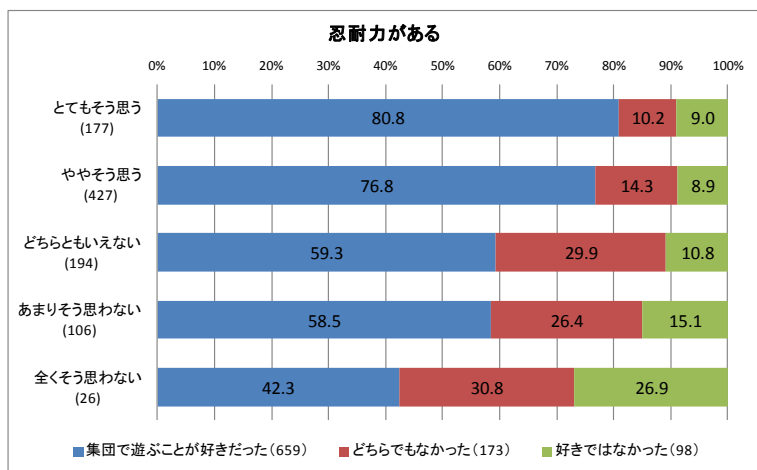
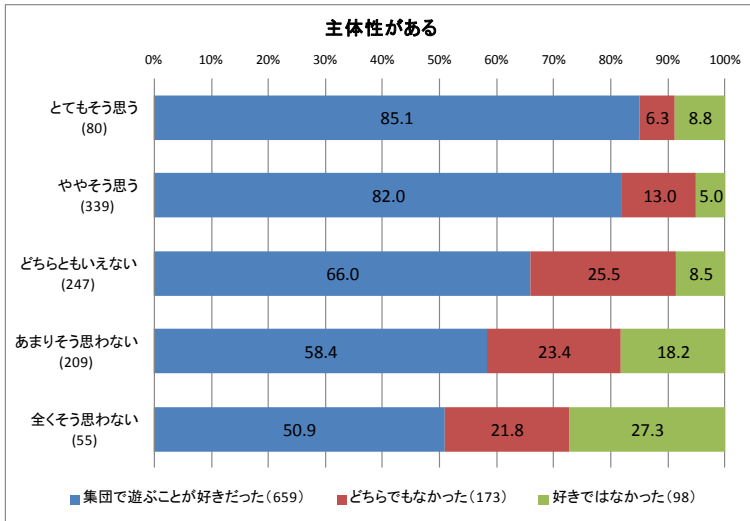
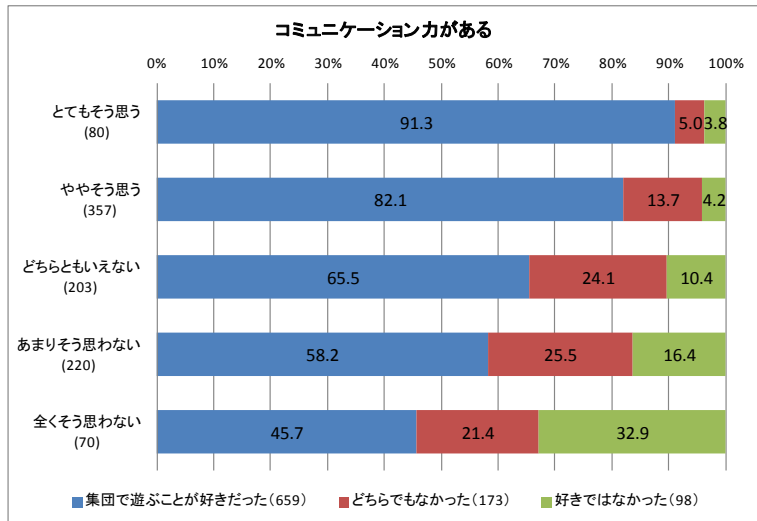


社会人能力の捉え方と遊び体験の関連性を見ると、自身の能力に肯定的な若手社会人ほど、子どもころに「よく遊んでいた」と答えた割合が高いことが明らかになりました。自分が能力を持っているかという問いに対し「とてもそう思う」と答えた中で、いずれの能力でも「よく遊んでいた」の回答が 6 割を超えており、特にコミュニケーション能力があるかという問いでは、「とてもそう思う」の回答者の 80%以上が「よく遊んでいた」と回答していました。一方、どの項目においても、自身の能力に否定的な若手社会人ほど、子どもころに「遊ばなかった」割合が高い結果となりました。特に、コミュニケーション力では「全くそう思わない」と回答したうちの 3 割以上が「遊ばなかった」と回答しており、「とてもそう思う」群との遊び体験の差が鮮明となりました。

## ～自分の社会人能力に肯定的なほど、「集団で遊ぶことが好きだった」と回答～

### 【社会人能力の捉え方と集団遊びの印象】

次に、Q1の社会人能力と集団遊びの印象について調べたところ、下記の結果となりました。集団遊びの印象は、①「集団で遊ぶことが好きだった」群（小学校低学年のころ、集団遊びが「とても好きだった」「やや好きだった」と回答）、②「どちらでもなかった」群、③「好きではなかった」群（集団あそびが「あまり好きではなかった」「全く好きではなかった」と回答）の3群に区分しました。

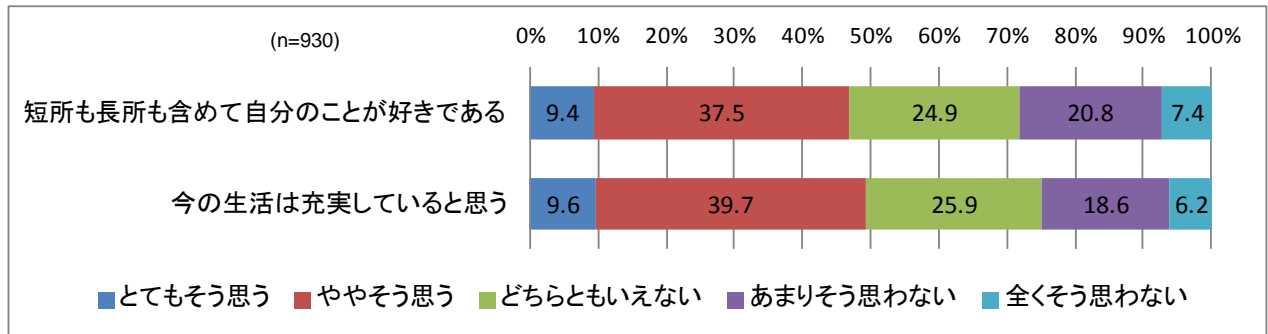


結果は、自身の能力に肯定的な若手社会人ほど集団で遊ぶことが好きだった一方で、能力に否定的な若手社会人ほど、集団遊びが好きでなかった傾向にあることが分かりました。集団遊びでは、仲間とのコミュニケーションを通して意思疎通を図るのはもちろんのこと、遊びの中でルールを決めたり、譲り合ったりといった、対人関係の調整や自分の感情・衝動のコントロールを学ぶ重要な遊びです。他者に対する思いやりの心を持ったり、集団における役割認識などを学んで、子どもたちは少しずつ社会性を身に付けていきます。この結果から、集団遊びに対する積極的な姿勢が、自分の能力に自信を持ちやすくする1つの要因になると考えられます。積極的な集団遊びの経験を通して、他者と良好な関係を構築していく能力や忍耐力などのベースが育まれるのと言えないのでしょうか。

## 現状の肯定度・充実度と子ども時代のあそび体験

～約半数が自身の現状に肯定的～

Q2. 仕事に限らずあなたの普段の生活全般に関して、あてはまるものをお選びください。

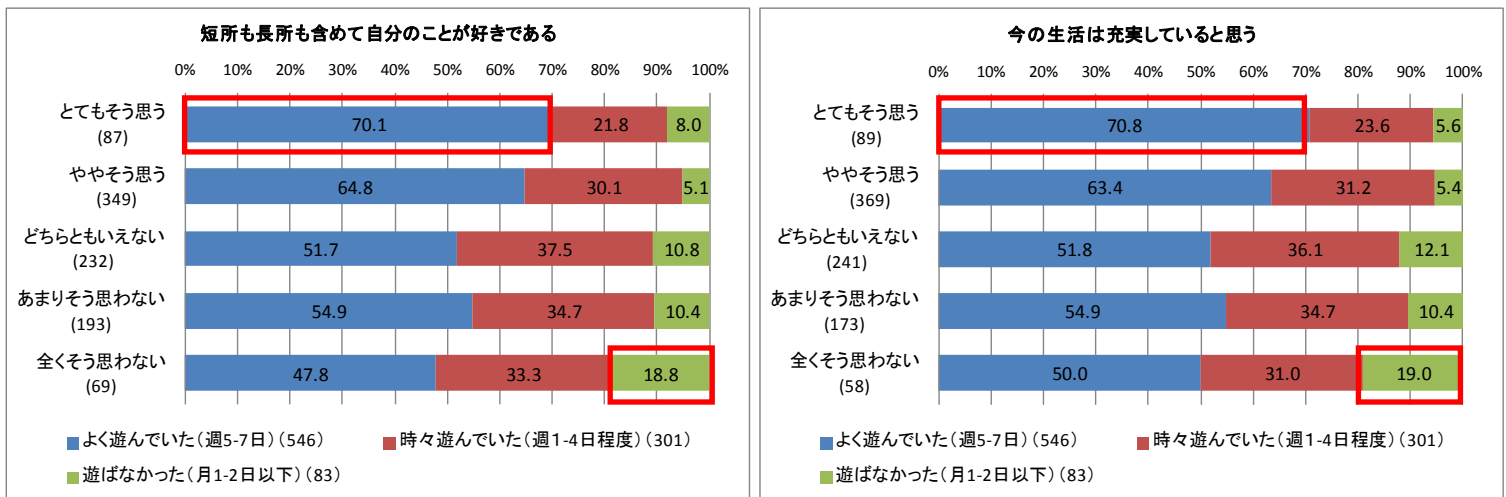


仕事に限らず「自分のことが好きである」、「生活が充実している」という回答が、「とてもそう思う」「ややそう思う」を合わせると、ともに約半数という結果になりました。若手社員の多くは、自身の性格や生活全般に対して、おおむね肯定的なようです。

～子どものころよく遊んでいた若手社会人ほど、自身の現状に肯定的～

### 【現状の肯定度・充実度と体を動かす遊びの頻度】

次に、Q2の自身の現状に対する肯定度・充実度と子ども時代の遊びの頻度の関連性について調べたところ、下記の結果となりました。あそびの頻度については、「毎日（週7日）」「ほとんど毎日（週5～6日）」を①「よく遊んでいた」群、「時々（週3～4日）」「たまに（週1～2日）」を②「時々遊んでいた」群、「ほとんどしなかった（月1～2日）」「しなかった（月1～2日以下）」を③「遊ばなかった」群の3群に区分しました。



自身の現状に対する肯定度・充実度とあそびの頻度の関連性において、自身の現状に肯定的なほど、子どものころに積極的に遊んでいた傾向が見られました。特に、「とてもそう思う」の回答では、「よく遊んでいた」の割合がどちらも7割を超えており、自己肯定感が高い社会人ほど、子どものころに遊びに積極的であったことがうかがえます。一方、「全くそう思わない」の回答では、「遊ばなかった」と答えた割合が他項目のおよそ2倍になっており、自身の現状に否定的な社会人ほど子どものころの遊びに消極的であった傾向が見られました。

今回の調査からは、小学校 1、2 年生の時期によく遊んでいた社会人ほど、自分の社会人能力を肯定的に捉え、自身の現状や生活全般に対しても満足しているといった、前向きな思考を持っていることが明らかになりました。コミュニケーション力や主体性など社会人に求められる能力は、ビジネスシーンに限らず、他者と良好な関係を築き社会生活を送っていく上でも大変重要な力となります。今回の調査結果から、子どものころに培った豊かな遊び体験が、社会人能力に留まらず、私たちが世の中で生活していくにあたって必要な素養を育んでいると言えるでしょう。

教育学を専門とし、自治体の子育て支援にも携わる明星大学教育学部教授の星山麻木先生は今回の調査結果と、子どもの遊び環境に関して次のようにコメントしています。

「子どもが異年齢の仲間と路地裏や野山で走り回って遊び姿が消えて久しい。歴史上はじめて子ども同士は自然に群れて遊ばなくなった。それが異常現象であることに多くの大人は気がついていない。

幼い頃『外遊び体験』をたくさんした若手社会人の方が、自らの『忍耐力・好奇心』など社会的スキルを肯定的に捉えている。それにしても『集団でよく遊んだ』人の方が『コミュニケーションスキル』など自らの社会的スキルを肯定的に捉えているというのは興味深い。確かに『集団あそび』には、様々な社会的スキルが必要となる。仲間との協調、リーダーとしての問題解決など役割は変化していくはずだ。『遊ぶ』とは自分で考え、動き、感じることである。集団遊びでは、お互い楽しく過ごすためにルールや思いやりが求められる。特にコミュニケーションが必須だ。その結果、相手の理解や協調性が身につく。そして社会的スキルの向上や自信へと繋がるのではないだろうか。

遊ぶことは生きること。子どもにとっての豊かな遊びは社会の体験活動なのである。

良識ある大人は、子どもの遊び環境をどうしても再生しなければならない。町、学校、地域、空き地や原っぱやビルの隙間。子どもの豊かな遊びの環境を準備し、走り回る子どもの姿と歓声をもう一度聞かなければならない。」

ポーネランドでは、今回の調査結果から、小学生時期の遊び体験が大人になったときの自己肯定感や考え方に影響することが分かり、子どもの健やかな成長には豊かな遊び体験が重要であると改めて強く認識しました。近年は公園の利用が制限されていたり、少子化による遊び仲間の不在など、子どもたちの遊び環境は充分とは言えません。当社では、子どもが遊ぶ機会を保障することが、子どもの成長における現代的課題の解決策になると考え、多様な場所での遊び環境づくりを今後も拡大・発展させてまいります。

#### 【ポーネランドについて】

ポーネランドは、あそびを通して子どもの健全な成長に寄与するため 1981 年に設立し、一貫して“あそびの道具と環境”を提供する事業を展開。一般家庭へ向け、子どもの成長に必要な生活道具としての“あそび道具”を提案、全国 92カ所で店舗を展開しています。同時に幼稚園や保育園、公園などに高品質な大型遊具や教育道具の提供を含めたあそび環境の開発を行っており、現在までに手掛けた実績は国内約 3 万カ所まで拡大しています。また、2004 年からは、子どもが遊ぶ機会を増やすために、親子一緒に様々なあそびを体験できる室内あそび場「キドキド」事業をスタート。現在全国 19 箇所、年間 200 万人以上の親子が訪れています。

《報道関係の方のお問い合わせ先》	
株式会社ポーネランド 広報室 担 当：讃井、村上 T E L：03-5785-0860 / 080-5901-3591 E-mail：sanui@bornelund.co.jp	株式会社プラップジャパン 担 当：五味淵、古澤、山口 T E L：03-4580-9104 E-mail：bornelund@ml.prap.co.jp
《一般の方のお問い合わせ先（ご掲載用）》	
株式会社ポーネランド	TEL：0120-358-518